

講演会「森浩一の考古学」講演録 1

## 森先生と園部垣内古墳の発掘

－同志社大学での思い出－

神戸女子大学教授 寺沢知子

寺沢です。森先生がご逝去されてから、お別れの会や追悼文集などで、先生を偲んで人柄や業績について語られてきました。そのような中で、今回の同志社大学歴史資料館による「森浩一の考古学」という展示企画は、森先生が設立にご尽力された歴史資料館に勤務する若林さんをはじめ、スタッフの方々による、心温まる気持ちのこもった展示がなされていて、充実した感慨深いものになっており、展示を見ながらあらためて森先生を偲んで、いろいろな思いがこみあげてきました。

この展示企画にちなんで、本日の講演会が企画されたのですが、私の話の後に宮川先生、天野先生が、森先生の業績について鋭く語られることと思います。私はその前座として、先生の大学での在りし日の姿を、学生として接した思い出を中心に、お話しさせていただきたいと思います。

森先生の指導のもと、多くの発掘調査をされてきた諸先輩がおられる中で、私がお引き受けすることについては躊躇しました。でも、森先生を敬愛され、この場に立たれるのによりふさわしい先輩であった、伊藤勇輔さん、楠元哲夫さん、久保哲正さんの3人の先輩が、森先生より先に逝ってしまいました。私は今日その先輩たちの先生への思いも込めてお話しさせていただくことにした次第です。



図1 寺沢知子氏の講演の様子



図2 井辺八幡山古墳出土 力士埴輪

### 「考古学実習室での森先生」

さて、私が入学しました1970年度というのは、大学紛争の最中で学内がたいへん荒れていた時なのですが、新町校舎の片隅にあった考古学実習室は比較的静かでした。

その実習室の風景として印象に残っていますのは、森先生が片隅の古い机で、和歌山市井辺八幡山古墳出土の禪をした力士埴輪（図2）を、講義の合間をぬってこつこつと復元されていた様子です。誰にも触らせず、自分が復元するというので、まるで我が子を抱きかかえるようにして楽しそうに復元されていた姿です。

今から思いますと、それほど上手な復元ではないようにも思え（笑）、少し傾いているような気がするのです。でも、反面それが躍動感のある、先生のエネルギーが投入されたような、今にも動き出しそうな仕上がりになっているようにも思えます。皆さんも見られたことがあるかと思いますが、いかがでしょうか？

森先生の考古学実習室での思い出は、やはり定例研究会の様子です。毎週木曜日の夜の6時半からの研究会には、先生が必ず出席されて、狭い実習室にあふれるばかりの学生が集まりました。その研究会で発表するというのは、ものすごいプレッシャーでした。ずっと黙って聞いておられるのですが、最後にとても鋭い指摘、あるいは温かい方向性を示したコメントをしてくださいました。その緊張感が、先ほど松藤先生がおっしゃっていた百数十人を超える考古学に携わる先生の教え子が輩出された一つの大きな要因というか、エネルギーだったのではないかと思います。

### 「講義の楽しさ、盗講生の多さ、休講なし」

森先生の大学の講義というのは、他学部からの聴講生・盗講生が多いということで有名でした。正式な履修生にしっかりまじって、違う学科の人も本当に熱心に楽しそうに受講されていました。

また、大学院では先生の研究室で一对一の講義を受けました。その頃も毎週のように先生が遺跡や遺物を見学に行っておられたのですが、その内容についての先生の鋭い直観や、広い知識を交えたみずみずしいコメントを聞くことができました。この講義は、まさに体感されたことを共有できる貴重なものとなりました。そして、先生の引き出しの多さというのは、いつも驚くばかりでした。中世の公家の日記などに記載された事柄なども、常に湧き出てきて、考古学の事象にリンクさせて話されていました。先生は寸暇を惜しんで全国の遺跡や遺物を見て回られました。須恵器1点を見るために千葉まで行かれたこともあり、必ず見たものしか文章にされませんでした。大学の講義は決して休講されませんでした。

### 「イスラエルの義勇軍？」

また「例え」というものが非常に上手でした。たとえば、講義の中で銅鐸の製造方法について、大判焼きの話が出てきました。わざわざ黒板に図解をしなくても、わかりやすい誰でもわかる例えを多用してイメージをわかせて説明されるうまさというのは絶妙でした。

タイトルのイスラエルの義勇軍、これは何のことかと思われると思いますか？あるとき母親がオレ

ンジ色の細いピンストライプの縦線が入ったスーツのようなものを送ってくれました。着なれない派手なもので恥ずかしくて、知った人にあいたくないなと思いながら大学にいったのです。ところが、運悪く真っ先に新町校舎で森先生とばったり会ってしまい、そのときに先生がいきなり「うわあ、どうしたんや、今日は。イスラエルの義勇軍みたいな服着て。」と言われました。イスラエルの義勇軍はこのような服を着ているのかと思わず思ったのですが、そんなはずはないですよ。でも、そういう直観的な比喻で緊張感をほぐすという、その洒脱な秀逸な表現力は、比類のないものだったと思います。私の中でいまだに心に残るフレーズの一つです。

### 「独特の指導法」

『同志社大学考古学シリーズ』が1982年から刊行され始めました。このシリーズを企画されたとき、先生のコンセプトは、「ともかく20枚で要点を書けないような論文はいらない、夜店のステッキのように持っているもの全部ならべて出してみせるのではなく、短くシャープなものを書け」というもので、それも2年に1度のペースでテーマを変えて書けとのことでした。

その要求に応えるのは、たいへん荷が思いことでした。でも、あるとき、「誰々は何打数だ。自分は打席を用意しているのに、打席にたとうとしないというのは見込みがない」と言われて、縮み上がった記憶があるのです。これは何が何でも書かなければいけないと思いました。それが今思えば、一つのことだけでなく、視野を広げて与えられたテーマで研究するというトレーニングで、そのように学生を指導されていたのかなと思います。それも先生流の弟子の育て方だったのだと思います。

### 「園部垣内古墳の発掘」

きょうの演題であります京都府園部町（現南丹市）の園部垣内古墳の発掘現場での経験を通じての、森先生の思い出をお話ししていきたいと思います。

これが園部垣内古墳の墳丘図です（図3）。小高い丘陵上に地元の方の厚い信仰を集めた厄神神社がありました。明治時代の地図では、東側の道路がすでに墳丘の前方部を破壊しているのですが、1972年にその道路を拡張する工事が進められていました。神社はすでに丘陵下に移築されていました。西側の麓からスラッグが出土したので、教育委員会の方は、急きょ、製鉄遺構を緊急に調査してもらえないかと教育委員会の方が大学にスラッグを持参して森先生に依頼されたのでした。

7月8日から調査が始まって、製鉄遺構（図のA）を発掘していたのですが、ブルドーザーは動き続けており、丘陵の南側3分の1がすでに削られつつありました。そのとき森先生が、スラッグに少量の埴輪片がまじっていたことから、ユンボの運転手さんに、1本縦にトレンチを掘削してくれと依頼され、9日の朝に、ユンボのバスケットの中に鉄器と鏡が引っかけたのです。京都府の遺跡地図にもなかった古墳が世に出た瞬間でした。

後から思えば、縦に1本トレンチを入れるという指示もさることながら、その場所が絶妙だったと思います。もう1mどちらにズレても良い結果は得られなかったのです。まさに先生の発掘歴にもとづいた鋭い勘に、運も加わったことがなせる技だったのではないのでしょうか。

工事を止めての10日間という緊急の調査が始まりました。梅雨の中でしたので、テントを張っての調査でした。あの規模の粘土槨をそんな短時間で掘って良かったのかという批判もあったかに聞いていますが、1970年代の経済と考古学の状況の中で、たまたまこういう縦にトレンチを入れるという行為によって、この粘土槨が未盗掘で発掘され、そういう経緯の中で、京都府をはじめ関係各所と交渉されて、工事をさし止めて10日間という日程をなんとか確保して発掘を開始したのです。出土遺物は一括して重要文化財として指定され、古墳時代前期の副葬品研究の中で重要な位置をしめています。その後、先生が調査報告の序文で、「旅先の田舎で急きょ交通事故にあって瀕死の怪我人に出くわし、やむなく応急処置の手術をするという、そういうような事情の中での調査であったから、この調査だけでもやれてよかった」というように書いておられます。

そのような未盗掘の粘土槨の主要部分を森先生の横で掘らせていただいた感動（図4）が、その後も園部垣内古墳の報告書作成に関わる大きなきっかけになりました。ともかく残って園部垣内古墳の遺物整理をしようという気持ちで大学院に進学しました。下級生が、分担して遺物を整理してくれたのですが、その後、私が就職してしまいましたので、1990年にやっと報告書が完成しました。森先生が序文の中で、報告書が出せて胸のつかえが取れる思いだということを書いておられたことが、非常にうれしい言葉でした。

園部垣内古墳発掘のエピソードで最後に一つだけ。本当に毎日毎日が雨の中だったのですが、宿舎から現場に向かうときに、森先生とたまたま並んで歩いていました。「この雨、止みますかねえ。」と思わずつぶやきましたら、「いまだかつて雨が止まなかったことはないで。」と一言おっしゃいました。本当にそうだなと思いました。それ以来、何かつらいことがあったときに、「止まない雨はない」というのが私の人生の教訓になっています。

### 「オーラに学ぶ」

最後に先生のオーラから学ぶというテーマですが、特に「考古学は遺跡学」という研究姿勢についての思い出を紹介します。先生がもっとも強く提唱されてきたことです。私も学生時代に先生から「考



図3 園部垣内古墳の測量図と調査位置



図4 園部垣内古墳発掘調査時の森浩一氏と寺沢知子氏

古学は遺物ではなく遺跡を研究する学問である」ということを叩き込まれました。その際には、京都大学の水野精一先生が著書ですでにこのことを書いておられることを学生に説明されるとともに、その先見性を称賛され、たいへん尊敬されておられました。このように、森先生は先学の研究というのを尊重され、必ず誰々先生の言葉だというように、自分の意見ときっちりと区別して話されるというところが、すごいことだったなと思います。先学に対しての敬う、尊重するという精神が非常に強かったと思います。

それからもう一つ、森先生は男女の差別なく指導されました。今では当たり前のことなのでしょうが、あの当時、他大学ではやはり年功序列とか男女差別が考古学の世界で結構きつかった時代でした。そういうことをまったく感じさせない、女性を対等に指導してくれた方です。それは今から思いますと、今日も森先生の奥様がいらっしゃっていますが、奥様にたいする尊敬の念が根底にあり、男女平等の意識を強く持っておられ、そのことが、大学での学びの環境として、とても大きな意味をもっていたと思います。

あと一言、先生が手術をされて入院されているときのエピソードですが、面会に行ってはいけないという申し合わせになっていましたが、せめて好物だけでもお届けしたいとの思いで、控室まで行きましたところ、ナースの方が気を利かして病室に連絡され、先生が3分だけ会うから病室に入っておいでということになりました。遠慮しつつも病室に入らせていただいたときに、まず第一声が「知子さん、足を切っただけ」でした。一瞬言葉に詰まったのですが、先生は続けて奥さまが毎朝、朝ご飯の前に来てくれて1日中一緒に居てくれているということ、嬉しそうに話され、明るい雰囲気になりほっとしました。「ほな、握手して、帰り」と言われ、心なしか小さく感じられた先生と入学以来初めて握手して退室しました。わずか2分ほどの最後のおわかれでした。

おそらく、私の後の講演では、森先生の鋭く激しい反骨精神について話されるかと思います。でも、教え子としては、このように奥様への感謝の気持ちを素直に表現されるような、ユーモアいっぱいの温かい人間性を感じながら、先生のもとで学べてきたことを本当に幸せだったなと思います。

園部垣内古墳の報告書の序文に「一つの事実から得られる真実というのは決して一つではない、これは私もいつも言っていることです。この報告書を土台にして、いくつもの論文が発掘の関係者によってたくさん生まれるだろうと。数十年、数百年後にも垣内古墳を見ることができない未来の研究者たちが、考古学や古代史の進歩のために、本書から新たな研究を作ることが続き、そのことを楽しみにしている」との言葉を記されています。その言葉をかみしめながら、「老年老い易く学いまだ成らず」という境地に入っている私ですが、まだまだ先生の晩年のように、エネルギーに生きなければと思っています。

取りとめのない思い出の話になってしまいましたけれど、森先生の人柄、大学での先生の在りし日の姿を伝えたいという気持ちでお話しさせていただきました。ご清聴どうもありがとうございました。